

この家で死にたいと母は言った

親を自宅で看取るということ

装幀・組版 佐々木暁
装画 今井麗

かわいいひと 長生きしよう
ほくをいつも 励ましておくれ
楽しいときも 侘びしいときも
ブツ飛ばすから

——「かわいいひと」

作詞・作曲…トータス松本・ウルフルケイスケ

はじめに 8

なるべく若い子の邪魔せんように 8

理想の死って？ 10

母はなぜ長生きだったか 12

「さっばらさっばら」だった私 16

一、今さら怖いもんなんか

あるかいな

なんかできもんが 22

死刑宣告を受けに来たんよ 25

耳下腺腫瘍 30

歯科医師の友に訊く 33

積極的治療か否か 37

実家に足繁く 40

寝てられへんねん 43

地元の友だち 46

ターミナルケア 49

すーすー眠れたわ 53

百日紅も紅梅も 58

二、訪問看護師、小森さんと

- 自分の家がいいんよ 64
まさに天使 69
ついに要介護認定申請へ 73
底冷えの滋賀 76
停電事件 79
こうしちやおれん 83
「暮らし」を続けたい 87
訪問看護を依頼 89
大事なものの、壊れる 92
私より先に死ぬんちやうかな? 95
訪問看護、始まる 99
まだ死なはらへんわ 104

三、ひいちゃんの青春

- ひなまつりに 108
愛された一人娘 114
お父さんに会いたいなあ 117
母のボツ原稿 122
恋、結婚、新しい暮らし 126

四、二〇二三年。別れの年

- 今年の決意 132
何事もなかりし如く 137
人生会議 141
ヴォーリズ記念病院へ 144
ホスピス体験入院 148
しんどかったし、来てよかった 152
ポケたかもしれへん 156

五、ホスピスを出て

- そちらに住むことにしたら？
うなぎが食べたい 167
100から7ずつ引く 170
みんな夢の中 173
できないことが増えていく
人を招く 179
楽しい分だけさびしくなる
家の力 186
もう死んだみたいに 189
スーパーブルームーンの夜 192

六、ラスト一〇日間で

起こったこと

- いざよひの月は 196
せん妄？ 200
疲れている私 203
入院いやや 206
柿の木に縄かけて 209
こちらこそありがとう 213
面会謝絶にして 216
遺書書くわ 219
PCAポンプ 222
鎮痛と鎮静 224
一分間の呼吸回数 227
大切な人を何もせずに見ておく力
喘鳴ぜんめい始まる 232
やっちゃん きて たすけて 235

いやや、洗う 237

ねむれねむれ 241

澤田久子死す 245

亡くなる約二ヶ月前、

入院中の母に宛てた手紙 250

特別寄稿

本当によかったね。 本上まなみ 256

おわりに 261

はじめに

なるべく若い子の邪魔せんように

澤田久子は九四歳で死んだ。

愛称「ひいちゃん」。私の母。

「この家で死にたいわあ」が口癖だった。

晩年はもちろん、八〇代のときも、なんなら七〇代も。

明日にも死にそうなおぶりだったが、誰がどう見てもまあ元気で、豆大福の二個目に手を伸ばしそうなおばあちゃんに「今そんな言われてもなー」というのが私の毎度の反応だった。

夫も実母もずっと前に亡くし、息子二人も家を離れたまま。田舎の古い家を護るまもるように一人で暮らす人。

若い子は若い子の人生があるし、なるべく邪魔せんように残りは生きていきたいなあと思ってる。けどやっぱりお世話にならんとねえ。生きてくこともなかなか難しいてねえ、じゃあ言うて、あとどういふうに残りをしようかなあとなつても、施設？ ……施設もねえ。いろんな問題もあるみたいやし、じゃあ言うてここに一人で暮らしても、だんだんと身体も弱ってくるし、どうしようかなあ？ とこれが私の問題です。(九一歳のときの久子談)

「この家で死にたい」

それは、母によらず、まあ七〇を超えれば誰もが思いあぐねることだろう。八〇を迎えると切実さは増してくる。九〇が近づくといよいよ……。

どこで、どう死ぬか？ 残念ながら、そうそう思い通りにならないこともみんな知っている。だが覚悟はできない。準備もどうしてよいのやら。母の言葉はこう続く。

「でもな、あんたが大変やろし、みんなを巻き込んで迷惑かけるし、寝込んでしもたらどうしようもないもんな。わがままは言われへん。でもな」

でもな、が多い。

結論から言うて、家で死んだ。入院していた緩和ケアの病棟から「一回帰るわ」と(まんまと)自宅に戻り、続いてそのあと数日、次男(私)の京都の家に滞在しながらも来るなり「ごめん、やっぱり帰るわ」と言い出し帰宅。以降訪問診療に来てもらい、やがて自室のベッドで

息を引き取る朝を（まんまと）迎えたのだ。

ひいちゃんの場合は、望み通りの去り方となった。

「大往生」というのは安らかな死のことで、死因が悪性腫瘍、病の発覚から三年を過ぎ、最後の数日間を苦しんだ人には使えない表現だ。しかし周囲の多くが「大往生でしたなあ」と口にする。大往生には立派な死という意味もあるそうで、そのことを指しているのだろう。

一九二九年（昭和四年）、広島で、ひな祭りに生まれた一人娘。

少女時代、空襲の激化と共に呉服商だった親の郷里の滋賀県、湖東地方の古い実家に両親と共に戻り、そのまま八〇年近くをここで生きた。

戦後の昭和を歩み、平成をやり過ぎ、令和という新たな船にも乗り込む。

令和五年〓二〇二三年秋、家族に見守られて、息を引き取る。

息子の私から見ても、ひいき目ではなく確かにリッパに生きた。

理想の死って？

多くは「家で死にたい」と願う。調査では国民の44%が「自宅で最期を迎えたい」と一位。

続く42%が「医療機関」と答えるも、その最大の理由は「家族等に負担がかかるから」（厚生労働省「人生の最終段階における医療・ケアに関する意識調査」2023年）。現状はと見れば、死亡者の

うち在宅死の割合は17%で、64%は病院で亡くなっている（同「人口動態調査」2023年）。

家で死にたいと願った者が、そうではない場所、寝床で、どんな思いを抱えて死を迎えていくのか、それは死者の数だけのケース、心があるだろうから想像は及ばない。だが、各自与えられた臨終へのカウントダウンのなかで、さまざまな逡巡^{しゅんじゆん}、希望や諦め、絶望が行き交うことは想像がつく。誰しもXデーがわからないため、母の言うように「……でもな」の繰り返しとなる。今の自分はまだ大丈夫そうでも、時間が経ち、もつと具合がわるくなったら？ 歩けなくなったら？ 認知症が始まったら？ 身内には迷惑をかけたくない。でも、果たして？

近年理想の死に方として「がんによる死」と答える識者がいる。なんだかよしとされる、いわゆるピンピンコロリという唐突な去り方に対して、病の宣告から死まで一定期間があり、それを別れの時間として生きられること、「さよなら」に時間をかけられることがその理由。

もちろん症状により千差万別、重篤なケースもあれば認知能力の問題もあるわけで、まったく一概には語れないのだが、少なくとも澤田久子の晩年に関する限り、それがけつして逆説的なもの言いでもないように私は振り返る。愚息としては親孝行に間に合った、の感が強い。

彼女のラストの三年間、九二歳・九三歳・九四歳は、死に向かう絶望、悲嘆にくれる三年ではなく、生そのものの年月だった。

イメージでたとえるなら暮れというよりは、まだ明るい時間。遅めの日中。太陽は空に浮かんたまま、といった景色で、母と私たちはよくしゃべり、よく食べ、飲み、笑って、泣いて、

たまに口げんかもし、たくさんの人を家に迎えた。

ビートルズ「ハロー・グッドバイ」の歌詞なら「ハロー♪」のほうだった。

サヨナラじゃなく、ぼくが言うのはコンニチハ。

久しく母一人だった静かな古い家屋——台所が、柱や畳、天井がさんざめき、春夏秋冬春夏秋……と次々新たな季節を迎えていった。

がんの宣告がなければ、母と息子がここまで深く交わることはなかっただろう。

「この人はまもなく死ぬ」。それを知ったとき、身内は慌てる。慌てて来し方を振り返り、行く末を想う。その人の人生を想う。

あちこちでばらばらに暮らしていた家族・親族・友人が連絡を取り合い、気持ちが一いつになる。良きさよならをするために集まる。失われた時が戻る。助け合う。時間を大事に使う。

母と私たちに与えられたのは、三年間の、文字通りの「長いお別れ」の時間だった。

母はなぜ長生きだったか

それにしても……と私は考える。戦争の時代に生まれ、けっして楽しいことばかりではなく、それどころか苦しきことの多かりき人生であったろうに、澤田久子はなぜこんなに長く元気に生きられたのだろうか？

けっこう食べた。

おしゃべりだった。長電話の人。ウワサ話が好きで、情報通。

人の名前を正確に覚えた。その子どもに至るまで。

よく笑った。温厚。あまり怒らなかつた。ワルグチはけっこう言った。

甘え上手。接待好き。料理好き。

歌が好きだった。聞くのも歌うのも。歌詞は正確だった。

毎朝うがいをした。規則正しい生活だった。常に忙しそうにしていた。

どの部屋にもカレンダーを下げた。時計もあちこちに。

畑仕事が好きだった。毎日草むしりをしていた（雨の日以外）。

身ギレイだった。毎晩絶対お風呂に入った。

毎日何かしら書いていた。読書は欠かさない。眠れない夜はラジオを聴いていた。

裁縫が得意で、編み物が趣味。タバコは吸わず、お酒はあまり飲まなかつた。

心配性で、怖がりだった。台風が来るときは三日前から大騒ぎした。

ムカデなどが出るともつと大騒ぎして、自ら退治した。

あちこちすぐに痛がって、それを誰彼なく伝えた。

すぐに病院に行った。院内では愛嬌あいきょうを振りまき、医師、看護師と親しくした。

薬は指示された通りに規則正しく飲んだ。「緊急入院セット」を常備していた。

絶対に転ばぬよう、細心の注意を払っていた。

二人の子どもに注意ばかりしていた（特に長男）。

子ども、孫、ひ孫をえこひいきした。愛した。

このなかのどれがひいちゃんを長く生きさせたのだろうか？

長生きの秘訣ひけつを孫に訊かれたとき、彼女自身はこう答えている。

おしゃべり！ 胸にためたらぜったいあかんわ。それと気ままになることやね。許されるし、この年では。あと趣味を持つこと。あと私の場合はやねえ、いい友だちがいて、辻さんに奥田さんに北川さんに……（談）

おしゃべりなのであった。

夫は五二歳で亡くなったのに、この人は九四歳まで生きた。

その差よ！ ああ、おとうちゃんは超のつく不摂生だったもんなあ。仕事が第一、いつも寝不足、ハイライトを吸い続けて、お酒かなり飲んで、娯楽はパチンコと麻雀で、コタツで株式の研究をし（たものの全然儲からず）、年賀状を大量に書いて（妻の友だちにまで）、運動せずに、糖

尿病になって、でもろくに養生もせず、一九八〇年三月、東京からの出張帰り、米原駅の寒風にさらされ、今で言うヒートショックにて心不全でコロリ。

おとうちゃんこそ、家族全員まったくきちんとお別れができなかつたよ。ワタクシ的には親不孝者のままで終わり、悔しい。

駆け足で私のことも書いておく。一九五七年（昭和三年）に滋賀県東近江市（旧・能登川町）で澤田家の次男として生を享け、彦根の高校卒業後、一八歳には実家を離れ、念願の東京、私大へ。六年通（ってしま）い、出版社に就職、主に男性誌を編集した。バブルと言われた年月を過ごし、泡のごとくぼこ湧き出る夢の時代を謳歌、そのあとは泡がはじけ、あわあわ慌てふためく出版業にずっと就いていた。退社後、家族と京都に移り、さあ関西暮らし……というときに『暮しの手帖』なる雑誌に呼ばれ、単身東京に戻されて編集長業に就き、また五年。

そんなこんなの目の回る日々のなかで、母のこと、郷里のことは仕送りなどでごまかしごまかしして、ほったらかしが基本であった。そもそも母は元氣でしたからね。次男の私は地元に住む兄にほぼ任せていたわけである。

二〇二〇年、滋賀の実家に近い京都に戻っても、まだ母は私の知っている、おしゃべりでお世つかい、ともすれば過保護を發動、一族を柔らかく頼もしく取り仕切っている印象。

本書は、そんな次男坊が、母の「がん宣告」に触れてから、約三年間心と体をどう動かした

かのお話、実録。あつたことを綴る。お役立ち「緩和ケア」ガイドを書くわけではない。書けるわけもない（そういう良書はすでにいっぱいあります）。

ただ、余命宣告を受け、近々の死が確定した人と、その人を愛する周囲の者たちが、どんなふうになんかを受け止め、戸惑い焦り迷い慌て、助けを求めたか、ということにはセキララに記すつもり。その姿には大なり小なり「あるある」がいっぱい見られるだろう。

同時に本当に何も知らなかった緩和ケアについて具体的に学んでいく記録とも言える。現役の医師・看護師をはじめとする専門家たちと対話し、アドバイスを仰ぎ、各種の「ケア」を受けていく過程では貴重な気づきがあった。

もう一点。私の京都の家族……特に妻は察しも理解も早く、協力的だった。パートナーは——本上まなみという有名人なのだがそんなことは今回一切関係なく——結婚した二〇〇二年以来、当たり前のように私の母に優しくした。聞けば妻自身は俳優にならなければ「福祉」の道に進んだと言う。その妻の母（私の義母）も足繁く久子の元に通ってくれた。

そういつた周囲の動き、反応も伝えたい。うまく伝えられればと願う。

「いっばいこっぴどい私」

さよならまでの約三年間。東近江市佐生町の実家が主たる舞台となる。最寄り駅は能登川。

琵琶湖の東、湖東エリア。彦根市と近江八幡市の間に位置する土地。母が幼少、青春時代を過ごした広島の話も少し。

書くうちにいろいろ思い出すだろうが、記憶を補ってくれる記録が手元になりに残されている。筆まめな母は日録や家計簿、手紙に加え、ささやかな「エンディングノート」も残した。母が八一歳のときに孫の多田麻実まみにプレゼントされたもの。以降思いついては書き付けていたもよう。その他ヘルパーや訪問看護師による記録。おくり手帳などもどさっと。

麻実は写真家で、インタビューにもトライ。珍しい動画も残してくれた。ときおり「談」として載せたのはここから。本書では日々撮り続けた麻実や私の写真に、久子のアルバムからのものもいくつか加えていく。

母のがんを知って以降「いっぱいいっぱい」だった私は、甥と姪、友人、訪問看護師等々にさまざまなメールを送りつけ、数々のやりとりを展開、救われていた。あの日々の出来事、迷い、揺れ動く感情が色濃く焼き付けられている。それらを採録していこう。

本書で「母」「久子」「ひいちゃん」等々、流れ、筆者の気まぐれでさまざまに呼び方が変わるが、要は澤田久子。身内の者が言うのも説得力がないが、面白い人であった。亡くなってから出てきたもの、残したものをみるにつけ、またいろんな人の証言を聞くにつけ、かなり特別な存在であったことに、今さら気づく。妻がずっと前に「わかってないように思うけど、ひいちゃんはスーパーおばあちゃんだよ」と言ったものだ。

病気を知ってからの母は「巻き込んでわるい」と繰り返し言い、事実大勢を巻き込んだ。でも巻き込まれることは全然迷惑ではなかった。むしろ多くは喜んで巻き込まれ、たくさんものを提供してくれた。具体的な介護作業はもちろん、アドバイスや励ましもたっぷり。

つまり本書は人を巻き込んだ記録でもある。死を巡る話とはそういうものだろう。たった一人との別れのために大きな動きが起こる。

もうひとつ。母を語る上で欠かせないのは戦争のこと。

昭和生まれの多くの人の例に漏れず、その影響を強烈に受けた。人、もの、青春、娯楽……数々の幸せの可能性を奪われた。

生涯口をついて出るのは「戦争は二度とやったらあかん」「国なんか信用したらアホや」。それについても書いておく必要がある。母の代わりに。

選挙には必ず行つた。常に体制でないほうに票を投じた。多くは結果に歯噛みしていた。

一度だけ行けないときがあつて、それは二〇二三年春の国政選挙。身体が動きづらく「今回はもう無理。ええわ」と言つたので、私は驚いた。この人が投票に行かないと言うなんて、もうおしまいだなとも。いや、日本じゃなく、母が。

繰り返し書いておかねばならないが、母の場合は希望通りの在宅死となつた。しかし、それは流れて、たまたま、そんなふうになつた、に過ぎない。



せんざい
前栽の縁側で ©Mami Tada

病状、構成員（動ける家族や協力者たち）、医療施設、居住状況、予算……あらゆる要因が合致した末の幸運な一例であり、ここで息子の澤田康彦が実に天晴れであったから、と間違っても主張する者ではない。

母が亡くなってから一連の日々を思い起こすと、あたかもドローンで山脈を眺めるかのように、全体像は一目瞭然、旅程はくつきりと鳥瞰ちようかんできる。だがそれは今になっての話（本書がそれだ）。

ここに登場する私たちは、当時奥深い山中にいて、鬱蒼うっそうとしたブッシュをかき分け、どこをどう歩けば正しいのか、そもそも久子がいつどこでどんなふう息絶えるかなど、本人を含めまるで見えず、その日その日を動いている。暗い夜が来て、なかなか明けられない夜がやると明けると少しほっとして、また励まし合い歩き出す毎日だった。

二〇二三年九月六日にベッドで添い寝。苦しんで「死にたい」「死なせて」「裏の柿の木に縄をかけて首をつりたい」「はよ業にさせて」、そう繰り返す実母の背にくっついて戸惑う次男坊さんよ。安楽死させる方法にまで思いを巡らすくたびれた私よ。

その人はあと五日で望みが叶うのだ。

この家で死にたいと母は言った

親を自宅で看取るということ

澤田康彦

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：1,980円（10%税込）

発売日：2026年4月24日

ISBN：978-4-7976-7480-4

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)